



①長いつきあいの常連さんの散髪をする常朝さん
②町内在住の書家から贈られた励ましの書。大切に飾ってあります
③いろんな話を聞かせてくれた常朝さん



「福」、「おまち」という書が目に飛び込んできました。「地震後に書家の方から贈つていただいた作品です。通りから見える場所に飾つていたら、一人の男性がこの書を見て涙を流しておられました」と常朝さんは、この励ましの書を大切にしています。

19歳で理容師の道に入ったという常朝さん。「家業を継ぐ使命感といふより、自然とこの世界を選んだ気がします」。父の忍さんは、理容師としてのこだわりの違いから対立もしばしばだったとか。「お互い職人気質で頑固もん同士。相いれないことも多くてね。今では笑い話ですけどね」と、すでに忍さんは勇退。それまで忍さんを手伝ってきた妻の怜子さんは、現在は息子である常朝さんのサポートにまわり、絶妙なタイミングで温かいタオルを渡します。

「誰しも、髪型が決まる」と一日中

毅さんが家業を継いだのは大学卒業後。「夜中の2時に起き、夜明け前からバイクで配達をしました。最初のころはなんさま眠かったですね」と懷かしみます。

年中無休の暮らしが当たり前だった毅さんでしたが、近年は妻の喬子さんと旅行を楽しんだりゴルフや庭の手入れをしながら健康維持を心掛けています。



手入れが行き届いた松岡家の庭



旅行やゴルフなどプライベートな時間を楽しんでいるという、毅さんと喬子さん

気分がいいもの。この仕事をやってよかつたと思うのは、お客様が笑顔になられて『ありがとうございます』と言つてくださいました。

毎日、夜明け前の決まった時間に新聞受けから聞こえる投函の音とバイクの発進音。それは一日の始まりを告げる音でもあります。

上町で新聞販売店「熊日益城販売センター」を長年営んできた松岡毅さんは3代目。12年前に勇退し、娘夫婦にバトンを渡しました。本店は物語で、町内全域の新聞販売を取り扱っています。聞けば同店の始まりは、熊本日日新聞社の前身・九州日新聞社時代からだと。つまり1世紀近くにも及ぶ新聞販売業というわけです。

けているそうです。「ばつてん生活

時間は以前と同じ。簡単には変わらないんですけど」と笑う毅さん。4車線化により木山店は、来年2月に役場前に移転するそうです。

3年前に同じ上町から移転した「Barber・Morishima（バーバー・もりしま）」。店主の守嶋常朝さんは4代目で、明治のころに曾祖父が理髪店を開業したのが始まりだそうです。

店内の壁に飾られた「陽はまた昇

懐かしい地蔵祭りとつくりもん



以前、熊本高森線沿いにあった地蔵が市ノ後天神社の一角に集められています

した。明治・大正・昭和と時代を移しながら町としての機能が整い、盛時には約130軒の店が軒を連ねていたそうです。

平成のころまで、8月24日の「地蔵盆」には地蔵祭りが行われていました。祭りの日には地域に点在する

店舗で、見物客を楽しませました。「子どものころは、つくりもんに使う竹や杉の葉、藻を取り行つたりして手伝ったものです」と懐つたりして手伝つたものでした」と懐かしむのは、上町で長年親しまれた「すし源」3代目の吉本光雄さんです。

すし源の始まりは戦前。光雄さんの祖父の源吾さんが魚屋として開業し、父の源吉さんが仕出しと寿司、宴会場として事業を展開していくました。歴代にわたる家業に終止符が打たれたのは熊本地震後。「店の被害も大きかったし、私の代で終わらせることに。町民の皆さんに本当にお世話になつた店でした」と話します。そんな光雄さんは今、妻の秀子さ

お地蔵さんを一堂に集め、通りで披露したそうです。また組ごとに手作りした「つくりもん」がそれぞれの店内に飾られ、見物客を楽しませました。「子どものころは、つくりもんに使う竹や杉の葉、藻を取り行つたりして手伝つたものです」と懐かしむのは、上町で長年親しまれた「すし源」3代目の吉本光雄さんです。

お地蔵さんを「ほどの」と「ほどの」に入れても痛くない「ほどのかわいい孫たちの世話をするのが日課だとか。末孫を抱きながら「この子たちの成長が楽しみでなりません」と目を細めました。



左から吉本秀子さん、末孫の莉那ちゃん、光雄さん

わがまち散歩



vol.55
木山上町・下町・蛭子町 編

4車線化が進む熊本高森線。木山交差点辺りも道路拡張工事の真っ最中で、以前と比べ景色もずいぶんと様変わりしました。

今回は、周辺のいろんな歴史をひもときながら、散歩を楽しんでみました。

